



江陰

蘇州府志

卷

文
卷
14
53

5
4329
2



きさきさき
まゆにふき糸の潔きかろしよ
深あすの光くをぞ恋す人の心
まよふくまきおあまともろの
形もあはれくや花の氣受て
とてあはるる下り



る紙を減あしとて家あまとい

七夕

権の葉を朗詠集の志かり
恋すはく我の心も白きよ
はと入や志るくまきよ拍子あけ
あはれまや物なほ袂縮詠を
袂の袖をなほけをりこれ其ま
ナ六日の夕かきあはる
なつううあはれよ
大方字やあはれこの空もたたら
相所はのや病起すや大まを
接待こそをなほつして西へり

英一蝶を画し賛を以て

四女くま月夜く家おとろ
心ごと大の端所詠て強き
岸乃さきい合せてたより
うまに浦あり

いふ書や八ふけてせくく摺
いさ書あろ一摺はやせのしみ

猪の露おろしをみはら
白萩を春のちをちを
恒く溜る花のいよも
さもくもいよも花をちを佛堂

間水はめ整

花をかや一輪清き一園のう
花自やも成のちの整をう
花の蘭香ううれをやと白
蘭夕狐のれ一奇楠を柱む

辨花を整

花をさやびら花のちのけ花を
花をさやさる男の胸をぬる
ものぬれ露をさる一萌をさ

あゝ義山

立去る一里眉をよ秋の露を
白萩や秋の刺をひとる花
花をさやさる男の胸をぬる
市人のおろしを露の中

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

才は志あるは横川の
すまねくははあこころ

あきさつわ子
昔八朝のる木槿ハ槿苑一白米
とて朝も候てゆかたなみ相む
ゆくようきしゆくしゆくしゆく
とて俗傳のたのしみあはれ

あきさつわ子
昔八朝のる木槿ハ槿苑一白米
とて朝も候てゆかたなみ相む
ゆくようきしゆくしゆくしゆく
とて俗傳のたのしみあはれ

かろくこや横川のさあはたやな
かにむねのまの櫛を圍く路
かろくやまのまをさあはたの
昔の桐葉けりかろく
かろくをさあはたのまをさあはた

あきさつわ子
昔八朝のる木槿ハ槿苑一白米
とて朝も候てゆかたなみ相む
ゆくようきしゆくしゆくしゆく
とて俗傳のたのしみあはれ

あきさつわ子
昔八朝のる木槿ハ槿苑一白米
とて朝も候てゆかたなみ相む
ゆくようきしゆくしゆくしゆく
とて俗傳のたのしみあはれ

あきさつわ子
昔八朝のる木槿ハ槿苑一白米
とて朝も候てゆかたなみ相む
ゆくようきしゆくしゆくしゆく
とて俗傳のたのしみあはれ

蠹てり葉中しきたるを
小百姓 鶴を乳老とありき
鬼灯や法師乃女う生写し
日ハ脚同屋の澹きとんち
良辰とありきもななく

訪りある人もあられを
中くよひどりあれいそ月を
名月とありきと押し下部
夕の園の隅にも通る月を

月天心
持二月至天心如月
中のさきへ天心ハまゝなる月
更とありてハ侍者なり

月天心を語りて所を過り
忠則た墳二村乃松に倚り

月と青月松より流すもの
名月やふと海なる比の
探りて月
移りよき時ありて月
月と青月ありて月
伸丸の魂ありて月

若月や秋の人住め峰の露を
 山の雲や海を離る月も今
 危の月主をともて草花を
 うきこの代ハ園こらふの月
 離れり酔るも鬼を我として
 玉山のすさたぬましとて
 其の付そあを眼仲よをて
 月名れをたのみさく砕くまの玉
 の花さハ妙さるるあるらふ此月

聖徳太子の八計野史
 中のうちまじり天のハ
 計三日月大の歌
 天のハ

雨のいのちもあひて
 名月や井泉花の魚躍る

揮歌雅字

一行の序や控ゆる月を新
 紀の流もとりすねをりる
 雨の仲の屏とふ歌をほて
 雨乃麻志くたけハリ用をう
 麻をく一節も力る屏の松葉
 麻帰てまをた木末あれまう

草島の美おひりし、麻は多
と夜帰てゆきすまのめ鹿の色

残照を詠

麻ふら山影明く入日哉

ある山さへ麻ゆたすうらた

葉を及びはる影すまら

あからしてまたれを夢さう

お目をとりしをて

麻のあり小坊主は角なるのり

あましく明らうやけ花のさ

老懐

去りしもの又さへいそそ我の音

父母のおとのみおのふれおのれ

あちらむせうもまらりおの暮

猪丸おま娘

我がそと我をそとやおの音

門とをれを我も行人おのれ

弓おらうそられらるおの暮

淋し方に枯りまればたう松の音

故人と別る

本名流りてささけらえむじり
糸すや釣の糸以あきれ風
秋の風書あをまを成つる
金屏の羅ハ誰カあまのうせ
秋風や干魚けらる候底

古く移竹をあらふ

去来去袖并袖りぬく秋を

水氷の月鼻書ゆくうらな
脈の伸へ葉ハぬげとどけらる

四十よみそしておんあそ

みやととれ

あそんるあそんるあそんる
人の世うらなをなたるうらな
我定るかうらなめうらな

去来去袖并

巾の初ったのまれ白のかり

去来去袖并袖りぬく秋を

水氷の月鼻書ゆくうらな
脈の伸へ葉ハぬげとどけらる

姓名ハ何 子ノ号ハ葉山子
三輪の田ヲ改作名ヲ居ルカ
山邊や流峰子なる川板の音
ヤ裡ニ有ル下ノ菰ノ花
とて我ノ口行キとささめ
くるとにえゆるやふりくれを
秋のせらふととてワノ葉山子
水邊て柳籠るをいふ
故々や海ハあくととそこれ花

主峰也ノ秋 更種ノ 葉山子
及ノ人ヤ事ノことを北ノ 葉山子
流る日ノくるととて流る葉山子

題白川

黒谷の隣ハ山ノやし 葉山子
カノ山ノやし 葉山子
綿つやたを山の花とて 葉山子
三徑乃十歩ヲ盡ス 葉山子
甲斐なぬや 葉山子

三徑の
蕭翊とて人三徑をわきて
松葉井を植へりその故を
甲斐の山ノ仙ノなると

甲斐の根や
甲外ハハ 諸のりやう 境 運送
するまじり
百日の鯉
これく ちんちん ちんちん ちんちん

こ

下

少魚釣の小舟槽なる急乃前
百日の鯉切をて 鯉のち
釣上ー鯉の巨口玉や吐
ひらりと大東地くがのびりー
くはく田疇芝園てをさる
下葉をたや志のせはれあき秋の
日影をたのせをほくく花の咲
物さるをさるにあられ候ー
水うれくあられあふれ あふれあふれ
香る

小舟のあたる音うれしきをねひけ
け本もとかくさくり 野おとー
山花や極の老ふく病む家
竹篔簹所 丹存へさる
とら鴨よ眠る鴨あのみは所
鴨立て秋天ひさくたのめあ
つらうあやをせせせる林
そら智やの機手のみさ
熊田降て志願の夕日や江鮭

こ

下

お途あつたゆりや 額白

秋乃暮けたの地ぢう油さまで

秋の地やゆりや奈良の乃々市

追剥をけ子く刺さる秋の地

秋田や水底の草を踏むは

丸山やうき子く大と画さるに

濛ろせととゆきをくれを

おのろ力乃眉よりの吼ておまの秋

甲賀之流の志のいの賭や度すは秋

松上秋のおをさるる刀のさぶ

力の秋やけを力とまのよおまあり

我則あるさーて

會日催しり候

小路りをちうくみゆるはいあひ

ふさくくふさくさうさるはあか

まを近をもちちとさはさああ

ふさ我く宿うて今ハ又止こぬ

石やお孤をぬるささぬ

甲賀之流の
赤大平記は甲賀之流のるま江外
の甲賀山より物さるまの伊賀甲
笑の侍ハ志のいの術をぬる
と廿は侍ハ志のいの術をぬる

赤大平記
六月十一日

甲賀之流

門木の
老母のいけを母のいけしる
男女の通移あり

秋き
附のきんありあり
角文はの
牛祭ハ太奉祭
九月十一日
とらするまてし 又牛祭画巻お
あといき画あり つけしき

角文字の赤あり
りつゝありあり
さふ意し

西行の
西行のを見す
たのたの
たのたの

る羽多く五六孫いそくせり
明子の老母を新食する物なり
おふる我若妻存すせり
市人のよは同くそのいせり
客傍より二階下り来る物なり
三井の山上よの三上いせり

秋き
角文字のいそ月より
牛祭
ら枯りるせり
漆の附

物中葉よりよめたる芭蕉
斗文又より八十のせり
おとくくく中絶
稲くけて風もひく
老の松
廣は

水くれて他のはつみやほり月
山草えんの木あり
泊るに乱てい
十月のせり
志られ後北月

十月の月とて雲はたはた
我日のあはれははるる

唐人もげらるるこの月

日てりて伏水の雲もあはれ

山嵐の菊もさうあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

さうの雲あはれあはれ

いそらを投壺あはれあはれ

菊もあはれあはれ

白菊やあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

高雄

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

日てりて
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

西行の
あはれあはれあはれ

谷水の書ておあるしもみらる
からえるるなはちるなりみ地
むらね葉今は商人なつり
はける

笛の音は時よりの来る頃
雨とれ少所ら果やとと
おのる海さくら文や落し水
をんのかの舟は下せられた上川
新米の垣田はほもりみ何
為格拾い目ある方あゆり

山家

旅よのねを傍ゆく免うま
聖障よのをたうすおさむ
欠く月もあつぬるおさむ
起る居るの病とらふおさむ
おさむをこし冠者外よりおさむ
そよおや通ぬの連のちやれ
山家の松路ゆるおに長

子篇のちよも帰や招まれ秋
秋風や酒肆の詩よふ海者
秋のものこそは石作もあつて

幻住庵の晩飯

旅をぬせし行きて

丸盆の雅さむの音やむ
雅招ふ播磨の児のよ後亦

探歌

餉よりや後やとるかり

信して蔵の昔ゆめ番椒
おとこ心こたへし梅もさ
梅もよれや念珠とけふ
けしきよとまぬ垣招や番椒
雅子乃寺ふ可いひて

几筆と竹所をさふ

草子や改と舉れた雪の月
萩冬ハ伏る丸松雪ハあらぬ
ふゆと此真つあ月のたるむ

奥書
庚子年
...

鬼也也
東貫ハ伊丹の人の慶にハ
とらりと座をたたく ちる 姿を身
とる ちる 座をたたく

鬼也也や新酒の中のお負く處
栗侍の恵心の伝ふは地地
しきまありたきれて新改を
あぬ方まで

く北の秋五職のくハ宿く在を
いしふふを賈とれぬ暮の秋
り秋やふく衣きたる秋人
治うはしゆの方や暮の秋

治東を多は鹿

おちりし時ふのやもあがりそ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like "Faintly visible text" and "Faintly visible text".

Faint handwritten notes at the top of the page, including "Faintly visible text" and "Faintly visible text".

やぶ部

昔の
楠の根を
古金の
まーめの二のえんきー
ころや楠ハ常盤木まき大木の
すん古金の葉ー
まーまはゆんれん

まのむしのねーに 幼時由
幼志を眉に鳥帽とのま
楠の根を静しぬすむ
時多しや葉葉少く
しーや葉のころ見の上
古金の葉葉と白の
あーや秋も存の
ッの幕ひと青く

くくう尾の
丹楓を
十日の
やう
おとれ
や
初
居
た

おのゝ東城下へ書きたるは
勝まで進み書きたるは
おのゝり佛に書きたるは
東山乃抄に書きたるは
たの一言は佛よりせよ

為雪と云ふ人川左の備前守
いそせふと云ふ人河内守
たのいといふ人安芸守
のしらやけん 藤へや左衛門

大兵乃うゝああるは高田
席の座を踏く 狹きふとん糸

下段

あふたると等もたぶくとす
治元たりと云ふは
いとあふとる二柳

兼生乃衣袴はくして
白鳥川や大のらむる
枇杷の花もすさむ日

葉の
六祖檀經より故より六祖惠能
大師の六物の門三衣二鉢を以て

大船の六時の内三時二時三時
六時野路の六時六時六時
六時六時

茶の花や白も草もあはれ
茶乃も草や花をとりて路を
咲けどもあはれあること
花をとりて路を

ある下お氏の別書

早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ
早ゆや山もあはれ

一茶もあはれ

いふもあはれ

よのけは

羽織もあはれ
風もあはれ
夜もあはれ
おのれもあはれ
水もあはれ
里もあはれ

大船の六時の内三時二時三時
六時野路の六時六時六時
六時六時

巻之二

「[1]のちまひ 嵯峨の鮎屋は都多
身立はまのこがの桂川と鮎のちま
ひ」

水乃舟 舟の草をたぐふ女は
かたへく入火と徳音キルや小舟
春里の浦を舟にゆき
浪をたぐひしとせられ都多
子梅や水立の里乃ち智恵女
宗任子水立をせとゆき月
こりて能みおしてむ
相立はけ所をたぐひて
さしきてかた風洞は儼ハ

小舟の出来

秋のせのちまひのちまひ
小舟とはいふて せせとせとせせ

小春風を帆もき合ふと
舟の梅のちまひのちまひ
か梅のちまひのちまひ
きんちのちまひのちまひ
老女のちまひのちまひ
小舟のちまひのちまひ
つれづれにちまひのちまひ
ちまひのちまひのちまひ
ちまひのちまひのちまひ
ちまひのちまひのちまひ

親ふふやうにうまやき出梅うを
 炭団はより大梅の完よりお認めり
 諸命を松志はらう松やけけ
 うるにあらうまぬの陽をのき
 おりけはらうかきうふや其
 ぶあをまきほとく

巨梅もてあまのしと入世の
 腰めけのまはらうと巨梅
 けはらうけけのうととちほら

鏡の音あきとあまのし
 ぶほらうの望心をうめほら

春長梅會

おきふのうをちみほら梅はら
 大とところ番雲のうらうれの
 川をや梅木のゆかる二候
 子を梅のうぬさたので梅はら
 草植て梅の心ゆあうり
 梅のぬくさう梅はら

息秋子石の火とるる枯木

金輪寺芭蕉の墓

我も死して得く道志枯木元
るの尾ういそらるる枯木元
蕭條として石より入枯木元
大魚の病の復常とこのる

夜醒や病よの起つ痛に
待く人乃足音たをりて石葉
葉は黄く雨跡りくをせさる

た寺のあふあふははの前を
行きて侍て畑田をりてるを
道葉を拾ひて紙を捲くも
大いなる声もも脳中の書るハ
留るものもはれをわきまに
おのそのもあたるをうすあつて
さばを我もいふもたあるは
りら草柿のこもを葉と
西吹をさるたよるをさるか

辰中
不食
秋
石
葉
紙
捲
く
も
大
い
な
る
声
も
も
脳
中
の
書
る
ハ
留
る
もの
も
は
れ
を
わ
き
ま
に
お
の
その
も
あ
た
る
を
う
す
あ
つ
て
さ
ば
を
我
も
い
ふ
も
た
あ
る
は
り
ら
草
柿
の
こ
も
を
葉
と
西
吹
を
さ
る
た
よ
る
を
さ
る
か

殊風の

呉の強韜とよみ人老へ官もついで
ありし世のれんるをせしむる
のやまのついで 故年の鯉の鱗を
昔年の月味あつてきとして官を
くぬくぬくはう 口舌のハハハの
鯉くくく名おしき白り詩の此行
不鳥 鱸魚、鱸、自、愛、名、山、入
刺中、と、は、く、り、

鯉の相希くと鯉の
やけの我信をたるおま
秋風の長くハ志りやとけ
者ふせとゆくハ信を鯉
所脈の面世上のくを白眼哉
先んて鯉の世の友とハ
袴とて鯉の居る所を
雀英ハ向宗めて信を
おのこるしおとまいて

地をぬき佛に
清浄を
うとくの涙ゆるやぬる
大魚の兵庫の強撫を
几董とてハ信を
とあまをハ信を
風、鯉、吹、や、鉤、の、魚
こらやハ信を
おらや島の山月を

こしや何ぞ世にふるふ立お
風やまのひまそくきせぬの風
あけや清く山石をひかへてる
おらや岩く裂り氷の声

晋子とすと同

榴盆のみにくもや寺まらぬ
きふや百もてせる白くあり
初雪や消れそそ又その雪結
初雪乃ら底と叩た竹の月

題七步詩

雪おちや雪をふる葉屋の下
雪の音野ふもつて底よりそ
うつみちやあつた家も雪の中
いさ雪見 カタチツクリ 氷谷す 氷敷とくそ
福さけして底のふ柳を雪の人
雪白ーかそげの白人さして
雪おちやよりあつた家も雪の中
漁家屋一酒う歌入り雪を焼

馬の音の響く
上ハ馬の音の響く下ハ馬の音の響く

おろおろや室の掃屋の破さけ
入たのよゝもつらぬ物さけ
おろおろや刃を捲るはるへ縄
宿さめぬお影や雪の赤はさ

几重なるは舞より海さ

雲お百里舟中々我月を欲す

故く鶴其心余のを存せり

守りて海空と知是七中山雲々

此心して在再とて晦相の

代海をさすを海空のさす

たるをいふは世々の海空

けをいふは雲乃月の三風とふ

陶弘景景賢

山中の相 雲中乃ちらん

何ぞつれさや中ハ少風空々

川うて卒やあはむひ中ハ

みら子乃ちゆ眉眉空とみ

り粒て紙子の破れやをさす

牙まき

日八日し八月し月白の鹿
のの佛説みし又荏苒ハ
月日のせまらむと

山中の

陶弘景ハ晋代の人し松風を愛
し〜 善陽山ハ隱居で陶隱居
といふ帝さう政のたまき
ある時ハ使者をい〜 呼んで
決〜 呼ぶる

けのやほのえきまきりかひり
をさふへはし世のこゝろは
我ひゆき世のこゝろは
きりまきりゆきりゆきり
ひゆきりゆきりゆきり

自又

自又やゆきりゆきり
ゆきりゆきりゆきり
かのゆきりゆきりゆきり

香子信

信

自又やゆきりゆきり
新巻の地足を信ふ
書記典主の信ふ
水仙や美人の信ふ
あはれや美人の信ふ
あはれや美人の信ふ

自又せや
昔よりゆきりゆきり
張良の故を信ふ
すうこや東山
新巻の地足を信ふ
武門の人を信ふ

霧よあはて垂を刈るるぬるさ
葱嘗て枯木の岸をぬるさの
ひの此少く枯木古葉我
易水くわわの流るくまらる
血を踏 嵐は音乃こぼる

郊外

静れるの此木らや水の月
をさくら月と障をさすはる
あの句ハ夢を感せし

同二句

二村の借を一軒ぬるさ
木のむらり人の猿こむあら
器の美をあつてやあふら
芥入て香るあつてやあふら
鳴りまきて我あつてめ神印
一瓢のしんてあつてやあふら
おれたしの坊主のしんてあつて
ゆあふらのそらハ韻を神交

枕草紙ニ思入子ヲ法師ニナシタリシコソ
木ノ葉ハイトハキキナルカイト親モミヤ
葉ノ喧ノホノ端ノ極ノ息ノもシヨリナ
十ノトアリ
香具大木ノ香ノコトノ

和名葱ユキト云フ故ニユキト云フニヨリ

静れるの此木らや水の月
をさくら月と障をさすはる

花より表太

京より表具御太翁といふ風流の
老人ありしを時人傳ふは

花より表太雪より君より神叩
西へ入りしを海へ星をさす枝

此方積るといふは

此方積りや表より流す京の所
此方たすや大も伸くそこの自
是代衣をいで病もあつた
宿をせと刀積むを雪吹哉
さるるく掃きみよるの嵐を
此方魚のえものさしたのすい

負居ハ詠

別在るハ

寒苦鳥仙説く

此のハ一ハ Eragon の the first

此のハ Eragon の the first

此のハ Eragon の the first

此のハ Eragon の the first

愚より耐よと意を暗き雪の竹
このなるは流して賤しを苦なる
我のこれ果おろしるを流し
紙をさるお目ふくありれこ
氷る蛇乃油うくく角のな
岸北のひきこ火桶の並い居る
我を敵に降家定おろし福を
齒齧る筆乃氷を吐くおろ

玉あしき
韓信子食をたふし一 潘母
原のまの田授よ

玉あしき文程のそるあられ
玉まぬ 潘母の福をみたは
古也く 草履はきてみれば
山水の減るを減りて氷のな

倣素堂

乾能や其く密うついをあり
から軋く腰する市れを
のらきけや帯刀あり乃を所
諸浮師 卓能 白刃の吹を周

乾能也

傳素堂素堂の蘭風情を
祖翁曰素堂の蓮とまの
さきハ一白のまがくちきよけり
老るハ素堂を谷うるとする

鐵骨よふい梅の枝を

寫する重はこ
き梅や氷の送る鐵より
き梅をよお富や老る時

感偶

き月や門たの寺の天高
き月や鋸山石乃あは
寒月や枯木の岸乃所之竿
をくや衣徒の群議のて好

さきもやうきく池入誰う子と
おぼろなる声やさき念佛
旅の近及くたさ念佛
を旅離れ上の所まわらう
さきもやうきく池入誰う子と

几董判白合

解きあすり刀を齧り
まろくと五座座り茶喰
茶喰隣の直主 箸おま

書やりの

他人の宿まはれを極あり
風吹くるをまけぬ 春はあけぬ
よのさるまかりぬもまわらうとせし
とれんたり 西行 浪のるやゆ具
す一休と女の声とを極あり

書やりの

羅生門あけらるるをまつる 手本
ち原白く春のる 柳根あけらるる
羅生門 高白く

春はあけぬとせし
君運もよすいひゆるせと一七心
にさき木のまわらうと難魚病小
おぼろのや小枝も折ぬとち獲
くいさる啼や師走の子と
歩程くいてゆるさと古層白

手ひらく

雪のふり大さき

とひらく移るや雪のふ所ち
ゆくまろぬ田を廻るや金心脚
ともおれたるもくたれり

歌首

石公へ五百自らよすこれ
とちや乳睡のたのげ乃捧

笠受てつらあをさあ

芭蕉去てそのちいさく

蕪村白集下巻終

萩半翁常よりらくお白集はかくても
ありなんしそよ名たる人乃其白集
出る日來の色黒きを減するもの多し
況汎い乃字を也と志るた門汎は一人の
書材ありてあふうちよ白集を棒もちり
てめむきをよむむ翁中とよりゆるさす
翁滅後よいたるよ二と子りきとめおける
あつめて是を前後乃二編よ撰分て
小祥大祥二巻の追福のためとす也

其志又洵うすといへりされはる集を
 其に引くすはとあふがとぞ乃本意
 ありあらう今く是をてけをを識す
 へうすといふを田福志と云

天明四甲辰冬十二月

天の四甲辰冬十二月
 天の四甲辰冬十二月
 天の四甲辰冬十二月

其の志又洵うすといへりされはる集を
 其に引くすはとあふがとぞ乃本意
 ありあらう今く是をてけをを識す
 へうすといふを田福志と云

Handwritten text in a cursive style, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in black ink on aged paper.

飯人



蕪公翁白集

